

「神様が与えたプレゼント」

Iヨハネ 3:1~3

ロベール・シューマンというフランスの首相が生涯独身を貫きます。なぜ結婚しなかったかというところ、電車に乗っていて電車が揺れた時に前の女性の足を踏んでしまいます。女性はぱっと振り向いて「あなた何で前見て立ってないの」と怒られロベール・シューマンは本当に申し訳ないことをしたと思い誤ります。すると突然足を踏んだ女性が謝りだします「ごめんなさい、私の夫だと思ったの」女性は自分の旦那だと思い彼を怒ったのです。ロベール・シューマンはあまりにも違う女性の姿に、結婚すると女性はこの様になるのかと思ひ、自分は結婚しないほうが幸せなのではないかと思ったのです。そして生涯独身を貫きます。人の出会いというのはとても重要であり、そこから見出したその人の価値観というのはなかなか拭えないものです。人との出会いはとても大切なことです。

■ この身になりますように。ルカ 1:37~48

マリヤは御使いに「あなたは男の子を生まれます。」と言われた時、「なぜそのようなことが起きましようか」と疑います。それも当然です。当時は、結婚前に不貞を犯してしまえば死刑になってしまうかもしれません。しかし御使いが「神にとって不可能なことは一つも有りません。」と言うとマリヤは変わります。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」と信じたのです。はしためと書かれていますが、彼女はけっして諦めて嫌々従ったわけではなく、喜んで愛する神様に従おうとしたのです。しかし、その後のマリヤの人生は苦しみの連続でした。馬小屋という劣悪な環境で出産し、息子の命を狙うヘロデ大王から逃れ、そして最後には息子が十字架で処刑される姿を見るのです。そんな苦しみの人生を歩んだマリヤ。一度は神様に従うと決断しましたが、本当に自分の決断は正しかったのかという葛藤があったのではないのでしょうか。しかし、あの時語られた御使いの言葉に彼女は支えられ、乗り越えることができたのです。私たちが苦しみに遭うとき、マリヤに御使いを送ってくださったように、神様は私たちに助け手を与えてくださいます。だから私たちは信じるか信じないかを決断するのです。しかし私たちは弱いものです。信じているといながら、心にはたくさんの疑いがあるのです。しかしたとえ 99% 疑ってしまうような人生のなかでも、1% のからし種の信仰があれば山が動くと言われたのです。だから神様は、私たちにからし種に思えるような出会いを与えるのです。私たちがその出会いを尊ぶことができているでしょうか。

■ 信じる道への決断！！ I列王 18:21~24

アハブ王のもと、預言者としてたてられたエリヤですが、彼はカルメル山で自分の王であるアハブとバアルの預言者たちと戦うことになります。最初はイスラエルの王としてたてられたアハブですが、妻イゼベルに影響され、どんどん道を踏み外していきま。エリヤはそんなアハブ王から見放され、ついに国民も彼から離れていきました。彼は一人ぼっちになっていました。しかしエリヤはそれでも正しいことを伝える道を選んだのです。エリヤは苦しみのなか、それでも神様の約束に立とうとしました。クリスマスの時、暗闇の中にある一筋の光をつかもうとするのか、それともあきらめるのか。私たちがどちらを決断していくのでしょうか。このあと、エリヤは祭壇の上に雄牛をおき、そこにたくさんの水をかけました。これは私たちの疑う心です。本当は正しいことがわかっているのに、疑いや諦めによってそれを選べない。そんな弱さが私たちにあります。大切なのはそれを認めることです。神様は私たちに罪を気づかせたのです。その後、祭壇に火が注がれます。しかしこの後アハブ王は頑なになっていきます。結局人は奇跡を見ても信じません。私たちを変えるのは奇跡ではなく、人生のうちに起こる理不尽に対して信じる決断が出来たとき、私たちの道が変えられていきます。あなた自身の決断が神様と結ばれ神様はあなたに目に見える奇跡ではない奇跡を起こすことができるんです。

■ 神様のプレゼント

御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょ

これがイエス・キリストです。そしてイエス・キリストは一体何だったのか、これは種だったのです。(初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。ヨハネ 1:1) イエス・キリストは言葉としてきました。そして、聖書はこの「ことば」を種と言いました。そして、そのからし種のような小さな言葉を信じた人は山を動かす信仰を与えられたと言っているのです。

種を見たときに、将来できる実や花を想像してみてください。そんな風になると想像できますか。種とは御言葉です。そしてその種はまさかそんな風になるとは思えません。しかしその種が大地に植えられるとき、必ず花を咲かせるのです。だから信じなければなりません。信じずに置いたままの種は種のままにいるからです。だから植えるとき自分に死ななければなりません。

■ 信じるのが聖さの基

聖さとはなんのでしょうか。それは罪を犯さず、外側を整えることではありません。聖さとは信じるということです。私たちはすべて神の罪人です、失敗だらけの人生です。でもそれでも神様のもとに戻ろうとする決断が大切なのです。その時神様は私たちを聖いと言ってくたさるのです。「そうだ父のもとに帰ろう。」大失敗し、放蕩の限りを尽くしたあの放蕩息子が父のもとに帰ろうと決断したとき、彼は聖いとされたのです。神様は私たちの過去のすべての痛み、失敗をすべて取り去るために、愛のプレゼントを送ってくださいました。しかしそれは私たちに種のようにみずばらしく見えてしまいます。しかし、その種を信じて受け取り、蒔くことができたなら、私たちの想像を超える奇跡の木に育つのです。

■ ジャン・ヴァルジャン

ジャン・ヴァルジャンは自分の姉の子ども達のために、たった1本のパンを盗んだ罪でトゥーロンの徒刑場で19年も服役します。そして、行く先々で冷遇された彼を、司教が温かく迎え入れてくれます。しかし、ある夜、司教が大切にしていた銀食器をヴァルジャンに盗まれてしまいます。翌朝、彼を捕らえにきた憲兵に対して司教は「食器は私がお与えた」と彼を放免させた上に、残りの唯一の財産である2本の銀の燭台も彼に差し出します。それまで人間不信と憎悪の塊であったヴァルジャンの魂は司教の信念に打ち砕かれるのです。しかし彼の罪の習慣は変えられませんでした。その後、彼は工場を経営します。そんな中、一人の女性と出会います。彼女はジャン・ヴァルジャンの経営する工場から解雇され貧困のため髪の前歯までも売り尽くし、ついには売春婦として働いていた人でした。彼はその時、昔救ってくれた司教を思い出します。彼は彼女を救おうとします。そして彼女の娘が売られてしまいひどい目に遭っていることを知り助け出そうとします。彼は過去の自分と、良心との戦いのなか、正しい道を選ぼうとしていくのです。そしてその女中が人生を諦めた時に歌った歌「悲惨な人々」(レ・ミゼラブル)が生まれたのです。

■ 信じ続ける

スーザンボイルは47歳になっていて人生を諦めかけていましたが彼女は言いましたチャンスがなかった。そして、今日変わるかもしれない。そうして人々の前にあんな傷つけられながらも笑顔で腰を振って踊りました。人々はそれを見てまた嘲笑いました。

人の心とは何と汚いでしょう。しかしそれが私たちの心です。そして私たち自身もたくさんの痛みを受けて今日まで生きてきました。ひどい屈辱、ひどい痛み、悲しみの中で生きてきました。到底人には話すことのできない痛みです。しかしイエス・キリストはあなたの人生の重荷を全て取り去り、私が背負うから光を見よとあなたに言葉の種を与えました。もし信じるならあなたは神の栄光を見るという約束です。マリヤのように神様を信じ続け「どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」ここからマリヤは信じて十字架の前まで行きました。そして復活を見たのです。これが神の奇跡です。私達も神様を信じ続けていくことが出来ま

(要約者:泉水浩)

(2020年12月6日)